

寺西 基之(音楽評論家) *Motoyuki Teranishi***ハイドン：弦楽四重奏曲 第67番 ニ長調「ひばり」Op.64-5、Hob.III-63**

ヨーゼフ・ハイドン(1732-1809)は18世紀後半のいわゆる古典派時代に活躍し、様々なジャンルの作品を多数残した。とりわけ生涯通して夥しい数の交響曲と弦楽四重奏曲を手掛け、これらのジャンルの確立に多大な貢献をするとともに、いわゆる古典派様式を完成に導く役割を果たした。この2つのジャンルにおいて彼は一作ごとに多様な工夫を凝らし、様々な書法を試みながら、様式のあり方と可能性を多角的に追求していった。彼の多数の交響曲と弦楽四重奏曲には、そうした生涯にわたる努力とスタイルの変遷が刻みこまれている。

本日演奏されるニ長調の作品は、後期の1790年に書かれたものだけに、完成された古典派様式と円熟した書法が際立った名作である。「ひばり」という愛称で親しまれているが、別にひばりと関わる作品ではなく、後世の人が付けた題である。その由来は、第1楽章の第1主題が高く舞い上がるひばりを連想させるからとも、第4楽章の軽快な動きがひばりの飛ぶ様を思わせるからともいわれる。第1楽章(アレグロ・モデラート)は、軽快な伴奏の導入に続いてその第1主題が第1ヴァイオリンに伸びやかに現れる。第2楽章(アダージョ・カンタービレ)は豊かなカンタービレを生かした緩徐楽章。イ長調だが、中間部は短調に転じて気分の変化を作り出す。第3楽章(メヌエット、アレグレット)はメヌエット楽章で、中間のトリオは短調に転じる。第4楽章(フィナーレ、ヴィヴァーチェ)は無窮動風の軽やかな動きで運ばれる。

**ドヴォルザーク：弦楽四重奏曲 第12番 ヘ長調「アメリカ」Op.96**

アントニン・ドヴォルザーク(1841-1904)は、ボヘミア(チェコ)の民族主義的な作曲家として有名だが、晩年の一時期(1892-95)には故国を離れて、ニューヨークのナショナル音楽院の院長としてアメリカで暮らした。新大陸ではドヴォルザークはとて優遇されたようだが、愛するボヘミアへの想いは彼の心から常に離れることなく、ホームシックの状態に陥ってしまう。このアメリカ時代に書かれた彼の作品が、新大陸で知った黒人やインディアン音楽の特徴をも取り入れながら、それを常にボヘミアの音楽に重ね合わせることでノスタルジックな感情を表現するものとなっているのも、母国への想いの現れといえよう。1893年に書かれた弦楽四重奏曲ヘ長調「アメリカ」は特にそうした傾向が強い作品のひとつである。それは、この曲がアメリカ中部のアイオワ州にあるチェコ移民の村スピルヴァルで作曲されたことにもよっている。夏の休暇にここを訪れたドヴォルザークが同郷の人々に会って望郷の念を募らせたことは想像に難くない。この作品はそうした当時の彼の心境を、後期の円熟した確かな書法のうちに綴った作品といえるだろう。

第1楽章(アレグロ・マ・ノン・トロppo)はソナタ形式をとるが、民謡風の5音音階の第1主題、

民俗舞曲風の第2主題、ノスタルジックな小結尾主題など、いずれにもボヘミアへの想いが込められているようだ。ニ短調の緩徐楽章である第2楽章(レント)の哀愁溢れる主題も、もともとは黒人霊歌にヒントを得たといわれる旋律だが、作曲者の目と心はそれを通して故郷ボヘミアへと向いている。第3楽章(モルト・ヴィヴァーチェ)はボヘミアの農民舞曲的な素朴さを持ったスケルツォ。第4楽章(ヴィヴァーチェ・マ・ノン・トロppo)も、やはりボヘミア風の民俗的主題を連ねた生氣ある Rond 風のフィナーレである。

**シューマン：ピアノ五重奏曲 変ホ長調 Op.44**

ドイツ・ロマン派を代表する作曲家ローベルト・シューマン(1810-56)は初期にもいくつかの室内楽曲を試みているが、本格的に室内楽に取り組むのは1842年になってからのことだった。1830年代には専らピアノ曲に力を入れ、クララとの結婚を果たした1840年には多数の歌曲を創り出し、1841年には交響曲など管弦楽作品に挑んだ彼が、1842年になって室内楽に目を向けたのは、交響曲の創作をとおして伝統ジャンルの様式を彼本来のドイツ・ロマン主義的な音楽精神と結び付ける自信が生れたからかもしれない。この年、室内楽に取り組むにあたってハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンなどの古典を十分に研究していることにも、彼が本気でこのジャンルに挑もうとしたかが窺い知れる。

ピアノ五重奏曲もまさにこの年の産物である。ピアノと弦楽四重奏が室内乐的に結び付けられるだけでなく、しばしば協奏風に相対し、それによって外向的な若々しい情熱から内向的な夢想や憧憬まで、幅の広い表現を生み出している。第1楽章(アレグロ・プリランテ)は、明るい第1主題とロマンティックな第2主題を持ったソナタ形式楽章。第2楽章(イン・モード・ドゥナ・マルチア、ウン・ポーコ・ラルガメンテ)はハ短調の葬送行進曲風の主題による主部に対して、ハ長調の叙情的な第1エピソード、ヘ短調の劇的なアダルトの第2エピソードが挟まれる。第3楽章(スケルツォ、モルト・ヴィヴァーチェ)は音階を急速に上下行する急速なスケルツォで、2つのトリオを持つ。第4楽章(アレグロ・マ・ノン・トロppo)はソナタ形式を土台とした情熱溢れる変ホ長調のフィナーレだが、ハ短調で開始されるなど調的な構成に独自のものがあり、再現部の後に主調の第1主題に始まる第2展開部というべき長大なコーダが置かれている点も注目される。このコーダでは新しい主題も出現し、第1主題に基づくフガートなどを挟んで大きな頂点を形成、その後第1楽章第1主題とこの楽章の第1主題による2重フガートとなってさらなる盛り上がりが見られ、最後にもう1度コーダ主題が現れて輝かしく締め括られる。

ピアノと弦楽四重奏とが時に寄り添い、時に(終楽章は特に)火花を散らすこの傑作を、ドイツの伝統を受け継ぐゲヴァントハウス四重奏団とデビュー30周年の充実の時にある仲道郁代のコンビがどのように聴かせてくるのか、注目したい。